交通網発達で被害拡大

東京都心にもいるクマネズミ

ペストの病原体は、中央アジアのクマネズミを宿主にするペスト菌（エルシニア・ペスティス）だ。今年、ドイツなどの研究チームが14世紀半ばの黒死病の起源が、キルギス周辺にあるとの研究成果を発表した。多数の感染死者が埋葬された同国北部の墓地跡の遺骨から採取したペスト菌のＤＮＡを黒死病のものと比較調査して判明したという。

感染症の歴史に詳しい長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授（国際保健学）は、黒死病が広まった要因に、モンゴル帝国の交通網整備を挙げる。「ユーラシア大陸が一つの版図にまとまり、情報とモノの行き来を活発にする交通網が整備された。陸海の交通の発達が、感染症の流行に手を貸した」と指摘する。

中近世のペストは場所も時代も変わるごとに幾度も感染のピークが訪れた。山本教授は「非感染地域で感染が広がり、世代交代で免疫のない人々にも広がった」と解説する。また、ハンセン病やエイズと同様に「いつの時代も感染は差別や偏見、人権抑圧に結びつきやすい。そうした糾弾や差別があってはならないのは現代にも通じる」と話している。

＊ 歴史研究が深まるにつれて世界史のトピックは見直されています。「世界史アップデート」では、研究成果を反映した最新説を、広く知られた従来説と比較しながら紹介します。「日本史アップデート」と隔週で掲載する予定です。

2022年11月29日読売新聞夕刊